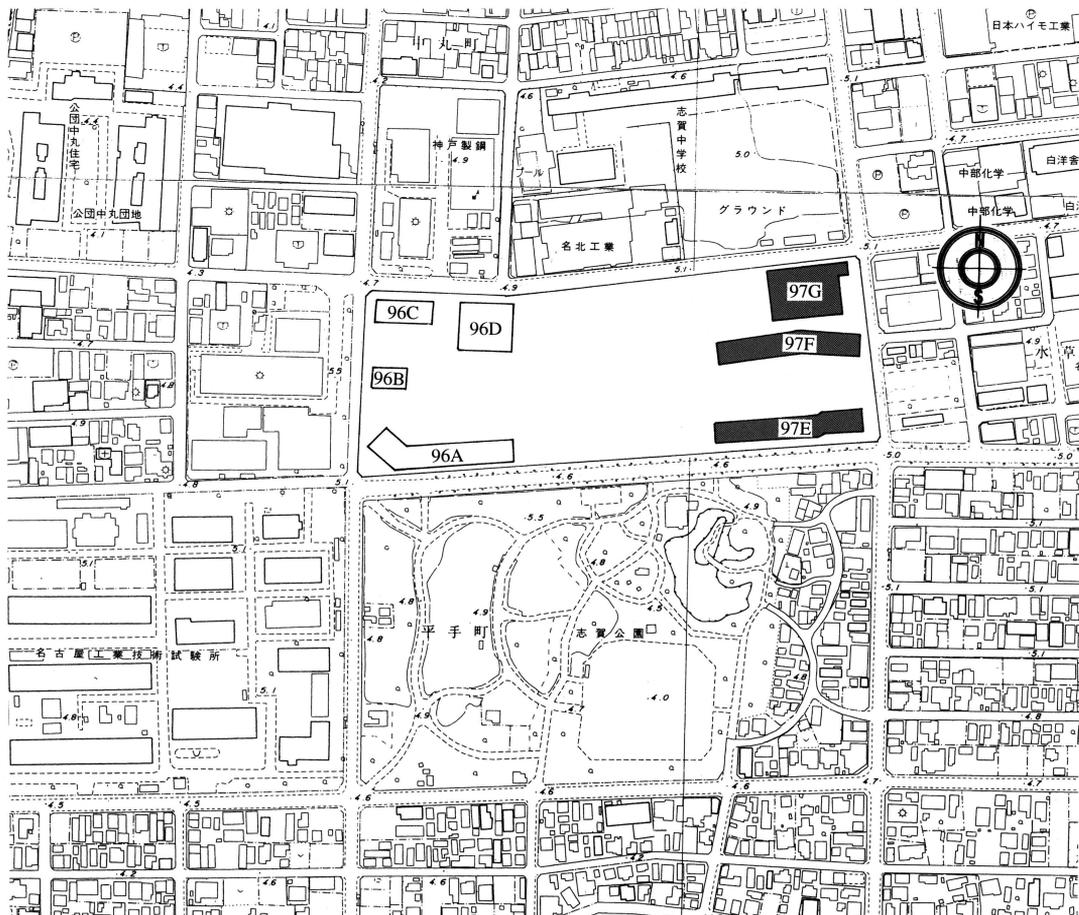


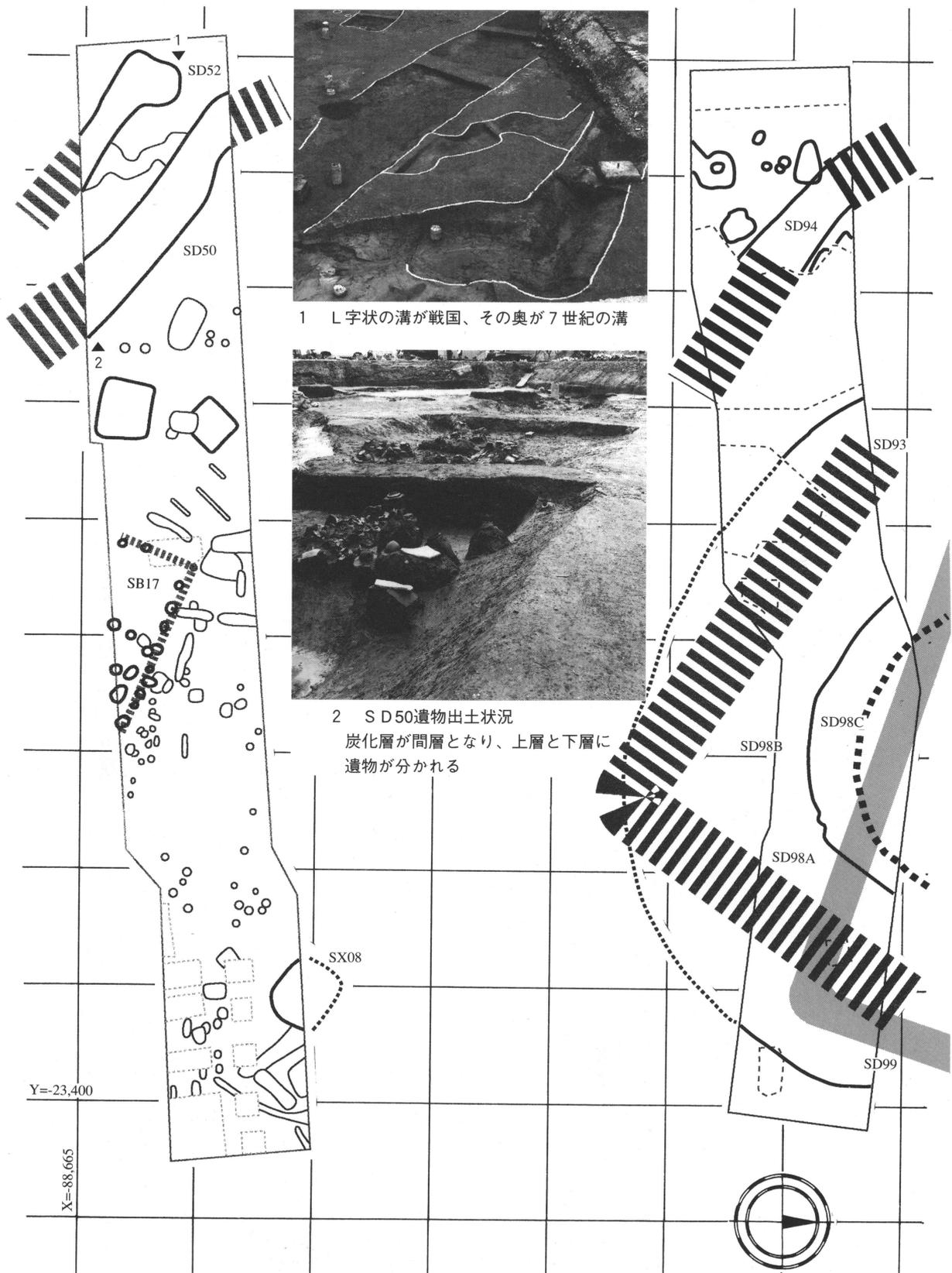
しがこうえん  
志賀公園遺跡

**調査の経緯** 発掘調査は住宅建設に伴う事前調査で、住宅・都市整備公団より愛知県教育委員会を通じて委託事業として昨年度から実施している。調査面積は4,000㎡。今年度の調査区は、昭和5年の志賀公園造成に伴う調査地点に隣接する。なお、昭和5年調査の遺物は金城文化財保護委員会により金城小学校玄関横ロビーおよび児童会室に展示・保管されている（調査研究編を参照）。

**調査の概要** 今年度の調査は3地区（E～G区）に分けて進めた。遺構面は概ね上面に古代～戦国と下面に弥生～古墳の2面確認できた。上面と下面の間層には1m以上の洪水性堆積が見られる。標高は上面の検出が4.3m前後、下面の検出が2.7m前後。遺跡は弥生時代中期・古墳時代中期・古代（7世紀）・戦国（15世紀）に大きく分けられる。以下、E・F区を中心に記す。



第1図 調査区位置図（1：5000）



第2図 97E・97F区古代～戦国遺構図(1:500)

弥生時代～ E区下面是調査区西側に弥生中期から古墳前期にかけての墓域が展開し、調査区中央部  
古墳時代 分に弥生中期の居住域が展開する。居住域では、円形の竪穴住居が2棟、堀立柱建物が3  
棟を検出した。円形の竪穴住居のうち1棟（SB12）は「松菊里型住居」に類似する形態  
として注目できる。約5mの円形プラン、支柱穴が4本、住居中央に小ピットを双方に持  
つ1×0.5mの長楕円形プランの土坑といった特徴を持つ。また、SB12は炭化材や粘土塊  
などが大量に含まれており、焼失住居と考えられる。床面付近には筵状の編み物が点在す  
る。支柱穴は4本とも礎板が確認でき、そのうち1ヶ所からは柱痕もセットで確認でき、  
上屋構造を知る上でも重要な類例となった。墓域では廻間～松河戸期の円墳1基と弥生中  
期の方形周溝墓7基を検出した。方形周溝墓の形態は、周溝が全周するSZ02、2ヶ所陸橋  
部をもつSZ06・08、4ヶ所陸橋部をもつSZ03～05・07がある。主体部と思われる長方  
形の土坑をマウンド上に2基確認したが、遺物を全く含まないため、時期など不明な点が  
あるものの、SK170は組合木棺の痕跡を確認し主体部と判断した。なお、各々の所属時期  
はSZ02が高蔵期、その他が概ね朝日期と考えられる。

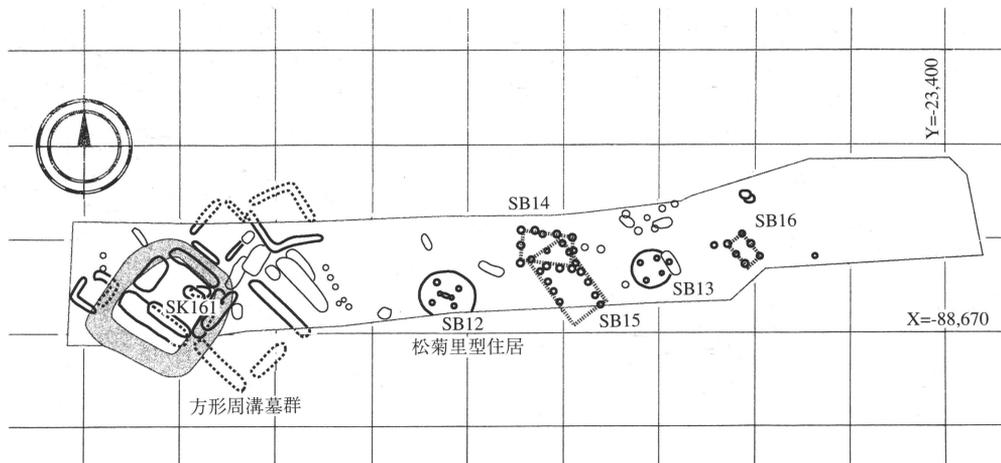
F区下面是松河戸期の建築部材を大量に含む土坑（SK216）のほか弥生時代中期前半の  
土坑・ピットなどが確認できた。SK216は板材・角材・丸木など多種にわたる建築部材が  
土坑の長軸方向に埋設された状態で出土している。



3 弥生中期掘立柱建物（SB14・15）



4 弥生中期方形周溝墓群



第3図 E区弥生時代中期遺構図（1：800）



5 「松菊里型」住居全景 (S B12)

径約5.5mの円形住居。主柱穴が4本、両端に小穴をもつ長楕円形の土坑が中央付近にある。  
検出時に、炭化材や焼粘土塊が多量に認められた。



6 主柱穴断面

柱穴下部に柱痕と礎板を確認した。



7 中央土坑 (S K161)

上位に炭化層が覆い、その下部より条痕紋系甕が確認できた。

古代～戦国 E区上面は7世紀後半を中心とする遺構群と15世紀後半の大溝（SD52）を検出した。SD52は幅2.5m、深さ0.7mで、断面が薬研堀状となる。北西で隣接するSD54付近でL字に短く屈曲する。SD54は調査区西端に位置するため、断定はできないもののSD52とSD54の間に陸橋部が想定できる。また、この2条の溝を境として東側には15世紀後半の遺構・遺物が確認できなかったことから、志賀城の北東端に相当する遺構として注目できる。

SD52の東側に隣接するSD50は7世紀後半の遺物が大量に出土した溝として注目できる。須恵器は杯Hを中心に、杯G、甕、無蓋高杯、甑など、土師器は大型と小型の甕が出土した。規模は幅4.4m、深さ0.4m、皿状の浅い溝。溝の埋土から、炭化物層を境に上下に分層でき、層位的にも安定した資料となろう。SD50の東側には堅穴住居や堀立柱建物などが展開する。なかでもSB17は推定3×7間以上、10×20m以上の大型堀立柱建物となる。また、このSB17に隣接して2ヶ所から柱痕と礎板が確認できた。

F区上面は調査区東端から中央部分にかけて8世紀後半～13世紀前半の溝群（SD92・93・98）が展開する。さらに調査区西端には15世紀後半の溝（SD94）が北西から南東にかけて縦断する。

SD94は幅4m、深さ1m、断面がU字形となる溝。出土遺物のなかに古瀬戸後期の仏供や花瓶Ⅲ類（尊式花瓶）など仏具に関わる遺物が含まれる。13世紀前半の遺構としてはSD92とSX10があげられる。出土遺物のほとんどが完形品の灰釉系陶器碗。

SD93と98Aは同一遺構で、調査区外で屈曲する。時期は8世紀後半。この溝の下にはさらに3条の溝が確認できた。SD98B・Cは8世紀後半～9世紀前半代の溝。BとCの区別は堆積層の相違から判断した。さらに下面で確認したSD99は洪水性の堆積と上位に展開する3条の溝によりかなりの部分削平を受けていた。時期は7世紀中葉。これらの溝群の性格は不明ではあるものの、大規模かつ同一箇所掘削を繰り返している点で重要な水路として機能していたことが考えられる。出土遺物に関しては、SD98CとSD99が注目できる。SD98Cについては、砂層からおびただしい量の須恵器・土師器などが出土した。なかでも知多式製塩土器・須恵器壺Gなど集落遺跡ではあまり見られない遺物を含む。墨書土器のなかには「山田」と判読できる資料も含まれ、地名の可能性も否定できない。SD99は完形品の提瓶・甕など副葬品に見られる遺物が多く出土している。いずれの溝出土遺物も層位的には安定した資料となろう。

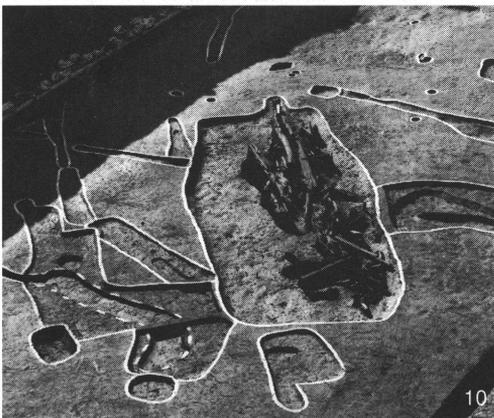
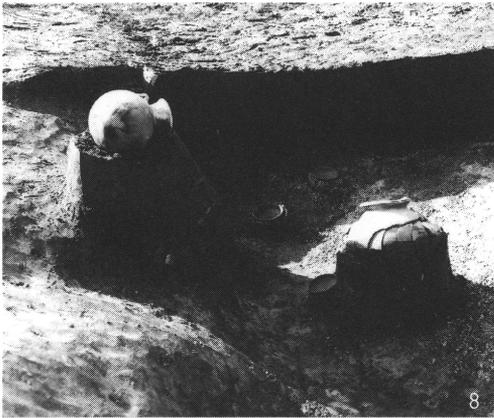
F区下面は7世紀代の大溝（SD99）を検出。SD99は上面のSD98と洪水性の堆積により大きく削平を受けていたものの、部分的には確認することができた。出土遺物は完形品が多く、須恵器杯H類を中心に、提瓶、甕、土師器甕などが出土した。

まとめ 本年度の調査を要約すると以下の通り。

1. 弥生時代中期の居住域と墓域を確認した。なかでもSB12は松菊里型住居に類似する形態の住居で注目できる。墓域の方形周溝墓は幾重にも重なりが認められるものの、

北西から南東方向に延びる微高地を基準に展開する。

2. 古代、特に7世紀後半代を中心とする遺構群は、F区の大溝を境に南側に展開する。逆に北側には8世紀以降の遺構群が展開するようである。F区の大溝群は自然流路の可能性もあるが、部分的に確認できるセクションや夥しい遺物の量から運河的な機能をもつ溝の可能性はある。
  3. 中世・戦国期の遺構はE区で2条、F区で2条の溝と大型土坑1基が確認されたのみ。E区のSD52・54は志賀城に関連する溝、城域の北東端となる遺構か？F区のSD94は地籍図に表記されている道と水路の位置と合致する。15世紀代の村境の可能性はある。
- (北村和宏・西原正佳・永井宏幸)



- 8 F区SD99遺物出土状況
- 9 F区SD98
- 10 F区SK216の建築部材出土状況
- 11 F区SD99出土遺物(須恵器)
- 12 F区SD99出土遺物(土師器)

